社会的紐帯の質的変容へのシステム理論的接近

赤堀　三郎（東京女子大学）

１．問題の所在

本報告では、大会テーマ「社会・経済システムのリストラクチャリング」に沿って、社会的紐帯（social ties）について論じる。

ここ 20 年来、「コミュニティの崩壊」「近代家族の解体」「親密性の変容」「未婚化・非婚化」「無縁社会」など、従来の社会的紐帯の、いわば非統合的な方向への質的変化が指摘され、また問題視されてきている。このような状況下、リストラクチャリングの方向性をどのように導き出すことができるか。これが本報告の立てる問いであり、本報告では、この問いに対してシステム理論の立場から接近を試みる。

２．従来の答えでは何が不十分か

いわゆる近代化は、社会あるいは社会的紐帯が、非統合的な方向へと向かうプロセスとしてイメージされてきた（都市化、あるいは地縁・血縁共同体の崩壊など）。またポスト近代（ハイモダンと呼んでも差し支えない）もまた、「近代」を支えた社会的紐帯、たとえば近代家族、母性愛、ロマンティック・ラブその他の綻びとして描き出されてきている。こういった傾向に対して、少なくとも日本では、「家族」や「ふるさと」や「愛」といった言葉が、統合を志向するシンボル（「やさしさ」「思いやり」、「地元」、「絆」といったものも）として盛んに引き合いに出されてきた。だがこういったシンボルに沿ってリストラクチャリングの方向性を構想するのは、上記の問題への回答としては不十分とは言えない。なぜなら、「社会的なもの」のリストラクチャリングの方向性として、「心的なもの」の操作に定位するやり方では、往々にして「個々人の意識を変える」「個々人にコミュニケーション能力をつけさせる」といった、大味な結論しか出てこないからである。

３．システム理論的接近の試み

では、この問題に対してシステム理論はどのようなルートを拓けるか。システムの秩序形成はけっして自然な・原初的な状態ではなく、システムが成立することがそもそもありそうもないこと、すなわち非蓋然的であるという前提から出発するのがシステムズ・アプローチである。社会的紐帯は、社会システムの秩序形成の一形態として捉えうる。社会的

紐帯という秩序形成の非蓋然性を低め、これを現実化させるのは、ニクラス・ルーマンの用語法では「メディア」である。この意味でのメディアが、社会的紐帯の質的変容にいかに対応するかという問題に答えるための鍵を握る、ということになるだろう。ここでは特に、リストラクチャリングのベースは、個人の心理や意識ではなく、「メディア」、言い換えれば「人と人とをつなげるもの全般」に置くべきだということを強調したい。この意味のメディアは、通常の意味でのメディア（マスメディア、パーソナルメディア、ソーシャルメディア）だけでなく、都市空間やオフィスや住居なども含めて、より広い意味で捉えうる。すなわち、（社会システムの）リストラクチャリングの方向性を描き出すにあたっては、個々人の意識や態度を操作するといったことではなく、「いかにメディアを設計しうるか」ということが出発点となるのである。

４．別様に見る――セカンド・オーダーの観察

ところで、既述のような「シンボル」（家族、ふるさと、愛、etc.）もこの意味でのメディアではある。いかにメディアを設計しうるかという問いは、この意味でのメディアについても考えることができるだろう。社会的紐帯の質的変容を、何かの喪失、崩壊、破綻として表現するのはたやすい。このような記述のし方は、受け手の購買意欲を喚起するなど、ある種の機能を有するとは言える。だがリストラクチャリングという点に関して言えば、このような表現では、失われたものを取り戻すという方向にしか設計図を描き出せない。失われたものを元に戻すことは非常に困難である。その代わりに、別の線引きを見つけ、それを用いて、社会的紐帯の質的変容を記述しなおす必要がある。たとえば、社会学で用いられる人格的／非人格的という区別も、従来とは別様の記述法に相当するだろう。

すなわち、社会的紐帯をリストラクチャリングする以前に、社会的紐帯の「描き方」のほうからリストラクチャリングを始める必要があるのであり、システム理論を用いることで、このことがはっきりと認識できるようになるのである。

５．結論

システム理論は、（社会システムの）リストラクチャリングの方向性を次のように導き出すことができる。すなわち（１）「（心的なものではなく）社会的なものに定位してリストラクチャリングを構想する」、（２）「社会的紐帯のリストラクチャリングを構想する前に、社会的紐帯の描き方をリストラクチャリングするところから始める」という二つである。